

シュメールの宇宙から飛来した神々⑥

THE LOST BOOK OF ENKI



# アヌンナキ種族の 地球展開の 壮大な歴史



ゼカリア・シツチン  
エハン・デラヴィ

【序文】

竹内慧【訳】

『[地球の主]エンキの失われた聖書』  
(超知ライブラリー)の完全新装版  
神々の一族が地球に刻んだ足跡、  
そのすべてを記した超貴重な記録



ヒカルランド

序文 時の流れは、明らかにシッチン説に味方している！

ホレイシヨよ、この天と地の間には、

おまえの哲学が夢見る以上のものがあるのだ。

—— ウィリアム・シェイクスピア

事実かフィクションか？ シッチンが伝える「人類創成」の驚愕情報

本書はシッチンが語り部となつて書きあげた宇宙規模の壮大な叙事詩であり、ホメロスの『オデュッセイア』に比すべき素晴らしい作品です。

著者のゼカリア・シッチンが地球に降り立った神であるエンキになりきつて、人類を創造した神々の物語を伝えてくれています。物語の体裁をとってはいますが、その情報源は、実存する古代シユメール

の粘土板や石板に刻まれている記録にもとづいています。

しかし、本書を読みだした人だれもが、ある深いジレンマに陥ってしまうことでしょう。

「これは事実なのか、それともフィクション（虚構）なのか？」ということですが。私もまた15年ほど前、はじめてシツチンの著作を読んだ時に同じ疑問をもちました。

事実とフィクションの違いとは、結局のところ何なのでしょう？

もしかすると、それはたんなる信念の強さか、あるいはある特定の事柄をどれだけの人々が信じているかという数だけで決められる、シンプルなことではないでしょうか。

たとえば多くの人々にとっては、イエス・キリストが実際に存在し、<sup>はりつけ</sup>磔になって死に、<sup>よみがえ</sup>再び蘇ったことは事実とされています。しかしキリスト教徒ではない人々にとってはフィクションにすぎません。

むしろメタファー（暗喩）、神話、伝説あるいは事実の誤った解釈だとみなされます。

死者は死んだままであり、例外などありえないのですから、事実であるはずがありません。しかし本当にそうでしょうか。現代において、私たちは絶対的に確信できる事実などあるのでしょうか？

私はカトリックの影響下で生まれ育ちながらも、そうした疑問を持ち続けていたので、正統派のキリスト教だけでなく『ダ・ヴィンチ・コード』でその名が知れ渡ったグノーシス派についても、かなり深く学んできました。

そこでは同じキリスト教でありながらも、まったく異なる議論が繰り返されています。どちらも信憑性があり、納得させられるだけの確固たる証拠があるのです。だから私は自分のなかで、同じものでありながらも相反する理論の折り合いをつけてこななければなりませんでした。

こと歴史となると、私たちは結局のところ絶対に「真実」は知りえない、というのが厳然たる事実です。時間というのは、究極です。どの時代のどの宗教においても、ある特定の体制下における情報などは消え去ってしまう。時間はすべてを、知ることのできない雲の向こうへと葬り去ってしまいます。

いかなる規則にも例外はあり、私たちは現行の信念だけに基づいて、物事を早計に判断することはしてはなりません。

実際に、ハーバード大学の人類学者ウェイド・デイヴィスによる充実した研究によって、死者はつねに死んだまま「ではない」ことがわかっています。広く知られているハイチのブードゥー教などの魔術型宗教の調査からもそれは明らかです。

疑り深い人なら「重力の法則はどうなるのだ？ 重力は「つねに」私たちが地面から浮き上がらないように作用しているじゃないか」と疑問に思うでしょう。しかし、その答えは「いつも、そうとは限らない！」のです。

歴史上、空中浮遊した人々についての報告は何百にもものぼり、それはしばしば大勢の目撃者の前で発生しています。当然ながら左脳型の科学者たちは、これを幻イリュージョン覚だと一笑に付すでしょう。

しかしアピラの聖テレジアが飛び去ってしまったように彼女の両足をつかまえていた正直者たちは、実際に彼女の両足をつかまえていたはずだと私は考えています。彼らは突如として幻覚を見たわけではないでしょう。歴史において、空飛ぶ聖人、武道家、ヨギーやシャーマンたちの話は枚挙にいとまがありません。

だからこそ、ぜひ最初から先入観にとらわれずに本書を読んでほしいのです。あなたがシッチンの信

奉者であろうと懷疑派であろうと、まず他者の言い分に耳を傾けてみることをおすすめます。

### 本書を読むために必要なのは、まず先入観を捨てること

本書には、ニビルと呼ばれる天体から45万年前に飛来し、火星と月に基地を持っていた空飛ぶヒューマノイド（人間そっくりの生命体）たちの姿が描かれています。彼らの指導者の一人であるエンキはそうしたすべてのことを、いつ、どこで、なぜ、どのようにして起きたのか、正確に伝えてくれています。読者は、本書の英雄たち、すなわちアヌナキ（天から地球へやってきた者たち）と現代人とのあいだに、多くの類似点があることに気づくでしょう。シッチンによる楔形文字の粘土板や石板の綿密な調査を通じて、私たちがみなアヌナキの子孫であることをエンキがつぶさに教えてくれます。それは驚くには当たりません。

私たち自身が地球外生命体（宇宙人）の子供たちだった！

果たして本当にそうなのでしょいか。たんなる突飛な考えにすぎないでしょうか？

相反する両方の主張を目を通すことよってのみ、自分なりの総合的判断が下せるのです。私は、シッチン氏の主張が正しいか間違っているか、そのどちらかを読者に説得したいのではありません。むしろ優れた陪審員と同じように、すべての証拠を吟味するまでは、どうか先入観をぬぐい去っておくようお願いいたします。

さらに、他人の考えを気にしないことです。他の人たちがどう考えていようと、あなたには何の関係

もありません。本当に自らの頭で考えはじめること、頭を使って判断を下すことは、きわめて重要なことです。

もし自分の意見がはっきりしないのであれば、他の誰かがすでに代弁してくれているかもしれません。いまやインターネットのおかげで、どんな話題でもすべて、さまざまな角度から検討することができるようになりました。私が子供の頃にはまったく不可能だったことです。

反シッチン派の言い分も調べてみました。古代シユメール神話を文字通りの事実として受け止めるシッチン氏に対する、懐疑派の主な反論は、氏の言語学的能力は平均以下という点に集約されます。

StichinIsWrong.com という反論サイトは、ヘブライ語やシユメール語といった古代言語の専門家とやらが運営しており、シッチンが間違っただけで誤訳した言葉のすべてを具体的に列挙して批判しています。しかし彼らの議論は説得力に乏しい。むしろ若い言語学者たちがシッチンに対して抱くであろう嫉妬しよとに近いものだと感じられます。シッチンの注目度は世界的に高い。いまや毎年開催されるシッチン研究会には、世界中から優れた学者たちが集まってくるのです。

ヘブライ語やサンスクリット語のような古代言語には、いつも魅惑的に感じるところがあります。それは象徴性に富んだ多面性です。解釈するためには非常に深い知識が必要とされるのです。

1990年代半ば、私がシッチン氏に会った時、彼はすでに年配の紳士でした。彼は半世紀以上もこの仕事に従事してきたのです。言葉遊びだけをもってシッチンの名声を傷つけようとする、自説ではそれほど稼ぎが得られない懐疑派の若い学者たちを、私はにわかには信じられません。

## ある日突然、高度なシュメール文明が登場した謎

シュメール人たちは、どのようにして全太陽系のしくみ、惑星群の大きさと軌道力学、そして小惑星帯の成り立ちを知っていたのでしょうか。

一つだけ確かなことは、私たちがいま事実と呼ぶものが、後世にはフィクションと呼ばれるかもしれない、ということですよ。

たとえば私が学生だった頃、月は地球から崩れ落ちたかけらでできたことが事実とされていました。教師たちから教わったので、私たちはみな、そう信じていました。実際には、それはひとつの理論にすぎなかったのです。現在の科学の多くがいまだに単なる理論の集合にすぎないのと同じことです。

実際には、アポロ11号が月に着陸し岩のサンプルを持ち帰った時、その鉄含有量が地球のものとはまったく異なっていたことがはつきりしました。月はどこか別の場所からやってきたのだという論理的結論に至ったのです。

シッチンは本書のなかで、月はどこか別の場所から来たのであり、その事実を古代シュメール人たちは知っていた、ということズバリ示しています。

月面着陸のあと、NASAはのちに月の地殻深くからの穿孔せんこうサンプルに着手し、月がもともとこの太陽系の一員でさえなかったことが明らかになりました。現行の元素周期表に存在しない太陽系外の元素を含んでいたからです。

「シッチンの主張が本当だなんてありえない！」という反射的な拒否反応を起こさぬように、注意深く読んでいただきたい。疑念を抱いているのは、あなた一人ではないのですから。

1976年、『The 12th Planet (第12惑星)』（邦題…『地球人類を誕生させた遺伝子超実験』ヒカルランド）からはじまった『地球年代記シリーズ』は国際的な成功を収めました。シッチンはいささか悪名高い『もう一つの歴史』<sup>オルタナティブ・ヒストリー</sup>提唱者とまではいかないまでも、広範囲に知れ渡るようになったのです。

私たちは考古学と調査だけから歴史を完全に知りえるかのように思っています。まるですべての古代文書が正確であると信用できるかのように。また月の組成に関する理論を持ち出すまでもなく、事象の公式見解が真実に近いかのように。

古代シュメール文明はどこからともなく突如あらわれたために、『インスタント』<sup>シグナライゼーション</sup>文 明とあだ名されています。それはまるで、ある日、母親に陣痛が起こったかと思ったら、次の瞬間にはすっかり成長していて教養まで身につけ、健康そのものの子供が母親のそばに立っているかのようなのです。

どういいうわけか学校の歴史教育では、まず石器時代があって、それからメソポタミアで文明が発祥し、その一部にシュメール文明も含まれると教えています。

一瞬にして、社会的な積み重ねもまったくないままに、ハムラビ法典と呼ばれる現在でもまだ使用されている法制度や、外科手術を含む医療、造園技術、農業技術、都市計画など、高度な文明が一気に出現したのです。

シッチンに反対する人々にずばり問いたい。「人類はどうやって洞穴から這い出して法体系を書き記しはじめたというのか。私たちはどうやってサルから人へ変身したのか」本当に筋の通った説明をして



ほしいものです。

### いまだ解明されない進化の謎

現行の進化論ははなはだ不充分であり、ほとんど冗談といってもいいものです。どういうわけか、そう「なぜか」私たちはサルになることをゆっくりと止め、魔法のように人類となったのです。それはまるで、環境条件が変化するまでじゅうぶん待てば、ブドウの木がスモモになると言っているようなもの。たしかに両方とも果物で、両方とも種があつて丸い形をしています。でもスモモはブドウではなく、決してブドウにはなりません。

しかし、私たちが理論上の化学的ケミカルスープから偶然作り出されたDNAによって、20万年のあいだにどうやって現在までたどり着いたのか。もっとまじな説明をしてくれるのであれば、耳を傾けるにやぶさかではありません。計画なしでは人類は発生しなかっただろう、というのが私の最終的な結論です。

シッチンは、多岐にわたるテーマを扱っています。とりわけ現代の科学者さえ困惑させる二つの問題があります。宇宙の本質に関する、マクロコスモス（大宇宙）のことと、DNAなど生物学に関する、ミクロコスモス（小宇宙）です。

不思議なことに、なぜか古代シュメール人はこれら二つの疑問に対する答えを知っていました。地球上でこれまで、絶滅規模の大惨事が何度も起きたのはどうしてなのか。また現代の人ホモ・サピエンス類は、どうやって、およそ20万年前に突然、極度に高度な脳を備えて進化したのか、明確にわかっていました。

“もう一つの歴史”を提唱するもう一人の異端児、グラハム・ハンコックと対談しましたが、彼さえシッチンの知的領域には踏み込もうとはしませんでした。でも、それはしかたのないことです。目下のところ、いわゆる宇宙考古学（太古宇宙飛行士来訪説）を進んで支持する人類学者や進化生物学者は、一人もいないわけですから。

これらの疑問に対する本当に満足の行く答えは得られないままです。推論家たちの肩を持つことが流<sup>は</sup>行<sup>ゃ</sup>ったためしはありませんが、だからといって彼らがみな、絶対に間違っているというわけではありません。

『衝突する宇宙』（法政大学出版社）で有名な精神分析学者イマニユエル・ヴェリコフスキーは、地球はかつて彗星や小惑星のような軌道からはずれた天体によって破壊されたことがある、という天変地異説を唱えて、世間から嘲笑されました。しかし現在では、大量の小惑星が地球に衝突したことを私たちは知っている。し、古代の人々が、それを引き起こす周期的な原因に気づいていただろうとも考えられます。このあたりについての詳細は、ハンコック氏との共著『人類の発祥、神々の叡智、文明の創造、すべての起源は「異次元」にあった』（徳間書店）を参照してください。

### 「アヌンナキを探せ！」イラク戦争に隠されたアメリカ軍の極秘計画

つい最近、東京のUFO研究仲間である竹本良氏から、マイケル・E・サラ博士の研究について紹介されました。Exopolitics（宇宙政治学）とは、簡単にいえば、宇宙人とこれからどうつきあっていくべ

きを考えることです。サラ博士は、国際政治、紛争解決、および米国外交政策の分野で国際的に認められている学者であり、さらに4冊の本の執筆・編集を手がけ、平和活動や民族紛争、紛争解決については70以上の記事、論文、書評があります。

その画期的著書『Exopolitics-Political implications of the extraterrestrial presence (宇宙政治学——地球外生命体はどう政治的な影響を与えるのか)』のなかで、彼はイラク戦争が非常に特殊な考古学遺物を探す目的で行われたという実態を鮮明に描きだしています。

世間ではイラク戦争が石油をめぐる戦いであったかに思われていますが、どうも別の目的があるようなのです。イラクには博物館だけでなく、いまだに砂漠に数千もの楔形文字の粘土板や石板が眠っていることから、現在でもアメリカが駐留しているのには別の理由が考えられるのです。

サラ博士は、アメンナキについての非常に特殊な情報を伝えていきます。アメンナキがスターゲイト(古代遺跡から発見された巨大な環状星間移動の扉)を利用して地球へやってきた方法についての情報が、イラクに存在すると主張しています。

アメリカ軍は、非公開投資会社カーライル・グループと協力して、イラクの博物館から数百もの古代遺物を盗んだと言われています。カーライルは、ワシントンD.C.に本拠地が置かれ政界にも影響力のある、資本金756億ドル以上で運営されている世界規模の会社です。

そうした情報は、だれもが非常に興味をそえられるでしょう。私は2年前、インターネット上の自分のサイトにその情報を提供しようとオーディオフィルをアップロードしたところ、5分もたたずに私のコンピューターはクラッシュしてしまったことは言っておきたい。

あれは単なる偶然だったかもしれません。CIAとNSA（米国家安全保障局）がエシユロンと呼ばれるハイテクの諜報システムを用いて人や情報を追跡していることは、よく知られています。その実態を克明に描いた『ボーン・アルティメイタム（The Bourne Ultimatum）』のような最新映画をみればよくわかります。

「カーライル・グループ」といった特定のキーワードがインターネット上で検索され、「バグダッドでの博物館泥棒たち」というキーワードと結びつけられていることが、カーライルにとってどれだけ都合の悪いことかは、明らかでしょう。

サラ博士の主張が正しければ、地球上でのアムンナキの存在は、いまだに現在進行形なのです！

### 最新科学の成果は古代シュメールの伝説と一致する！

本書を初めて読んだとき、脳裏からはなれない古風な英語で書かれた、Bear&company社の原本は、私の魂をひどく揺さぶり、深い滋養を与えてくれました。ギルガメッシュの叙事詩と同じくらい良質の、真の物語がそこにあります。

アムンナキの対立関係、セクシーなインナナ、故郷の惑星を救うために必要な金を見つけるために、地球へやってきた彼らのとてつもない挑戦の数々……。ここには傑作映画の要素がすべてそろっています。

批評家たちが好んで攻撃したシッチンのもう一つの弱点は、もし太陽のまわりで3600年周期の楕

円軌道を描くニビルが本当にあったとしても、間違いなく凍るほど寒くて生命は存在できなかったはずだというものです。

しかし過去10年で、科学の主流は、小太陽系を構成している褐色矮星かつしよくわいせいが、すこぶるありふれたものであること（そして明るい星でないため極度に見つけにくい）、さらには生命を探すのに最適の場所だろうことを発見してきました。褐色矮星にはじゅうぶんな光と熱があることが指摘されています。拙著『フォトンベルトの真実と暗黒星ネメシス』（学研）で、この問題をかなり詳しく取り上げていました。ニビルはそのような褐色矮星の衛星であり、地球の太陽の双子の連星だと私は考えています。

シッチンが最初にニビルのことを書きはじめた頃、これらのことは何一つわかっていませんでした。地球上の一流の科学者たちは夢にさえ思わなかったことでした。ほくら、時は隠すことも、暴くこともするのです！

月面に非常に複雑な結晶構造物のはっきりと写っていたために、NASAの写真が意図的に破棄された情報も、世間では広くは知られていません。1995年、私は二つの重要な会議に出席しました。一つはロサンゼルスで、リチャード・ホーランド博士の講演。元NASAの顧問で惑星軌道力学の専門家である彼は、月探査機クレメンタインが赤外線カメラで撮影した、ペンタゴンの極秘写真を見せてくれました。そこにははっきりと、月面の幾何学的構造が写っていました。

それらが「インテリジェント・デザイン」（知的設計、ID）であることは明らかでした。インテリジェント・デザインとは、天地創造説ともダーウィンの進化論とも違う、人類の起源についての理論をさす新しい用語です。

2007年、ホーグランドはロシアとアメリカ双方で、写真を破棄するように命じられた元NASAの職員とともに、記者会見を開き、元職員の手元に残っていた写真を喜ばしげに発表しました。ホーグランド博士は言うまでもなく、火星サイドニア地区の構造が同様にして人工物だと主張するチームのもっとも有名なメンバーです。彼は最近、そうした地球外生命体の証拠を隠ぺいしてきたNASAの半世紀にわたる過去の秘密計画を暴いた『Dark Mission: The Secret History of NASA』を出版しました。

最近では一般的な科学者たちでさえ、DNAは自然選択によってのみでは決して発生しえないというびっくりするような結論に達しつつあるのです。『ダーウインのブラックボックス——生命像への新しい挑戦』（青土社）の著者であり、DNAとその豊かな複雑性を研究している生物学者マイケル・J・ペーエが代表的な例です。

インテリジェント・デザインはまったく新しい証拠をもって、聖書の創造説のようなテーゼとダーウインの進化論のようなアンチテーゼとの橋渡しをする好例となるでしょう。

シッチンが伝えるエンキ説によれば、高度な生物工学の専門家たちがホモエレクタスと呼ばれる進化的生成物を用いて、ホモ・サピエンスを繁殖させたのです。

ダーウインも聖書至上主義の原理主義者たちも、それぞれ部分的に正しかったのです。旧約聖書の創世記を注意深く読んでみれば、『神々』が『彼ら』の姿に似せて私たちを作ったと書かれています。古代ヘブライ語や、シメール語によるその原型でも、単数形で『神』とは決して書かれていません。

そして、この『神々』が天から地球へやってきました。彼らはアヌンナキと呼ばれていました。

私が出席したシアトルでのもう一つの会合では、シッチン氏が講演者でした。会場に足を踏み入れた

とき、私はホーランド博士にばったり出くわしました。

世界はかくも狭く、それでいて世界にはまだまだ知らないことがたくさん残っています。

私たちは若い種であり、まだこれから長い進化の道のりが待っている、と私は信じています。

本書を読むあなたが、本気で心を開いて、自分が本当に「神々」の子供だと感じた時、エンキはこれまで出会ったなかでいちばん興味深い「人」となることでしょう。

古代の先祖たちとともに、この宇宙の旅を楽しまれんことを！

2007年12月17日

兵庫県三田市にて

エハン・デラヴィ

シユメールの宇宙から  
飛来した神々<sup>⑥</sup>

# アヌンナキ種族の地球展開の壮大な歴史

THE LOST BOOK OF ENKI

目次

## 序文

I 時の流れは、明らかにシツチン説に味方している！ エハン・デラヴィ

## 前置き

23 太陽系第12惑星の「宇宙からの神々」はなぜ地球で人類を創成したのか

## 証言

37 これは「宇宙からの神々」の地球指導神エンキによる口述筆記録である

## エンキ神の御言葉

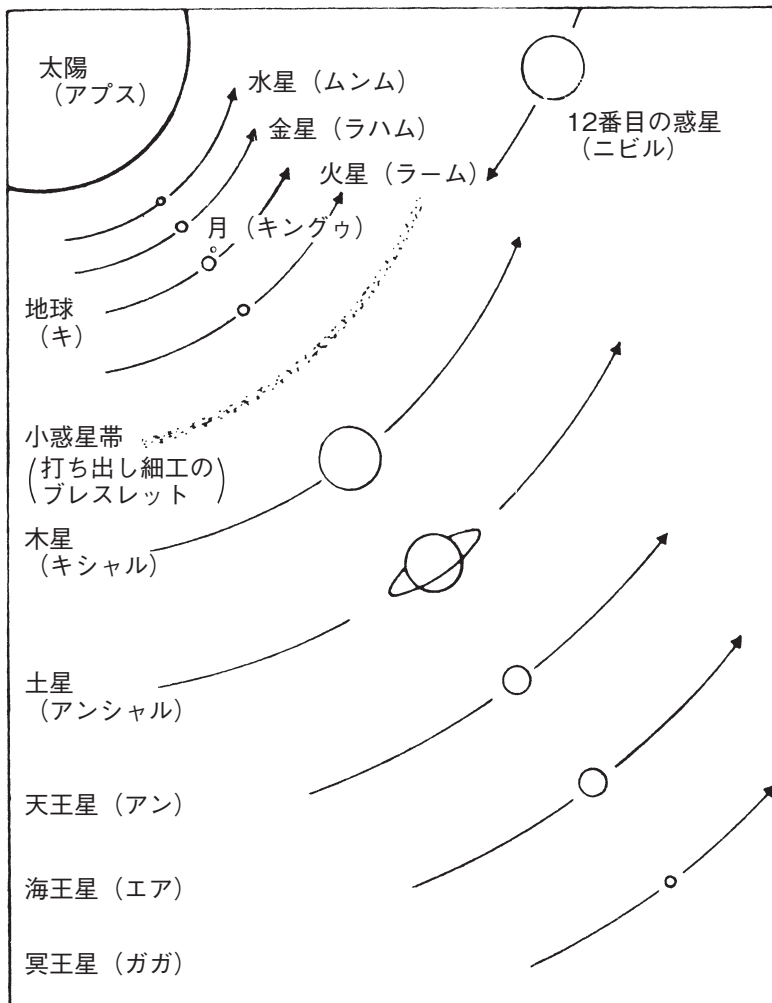
43 14のタブレットから成る「宇宙人から地球人類に遺された聖書」  
レコード



第1のタブレット	45	第12惑星ニビルでの南北覇権争い——核戦争の勃発
第2のタブレット	77	黄金の惑星地球への着陸——太陽系地球誕生の叙事詩
第3のタブレット	109	惑星地球への調査団派遣——地球植民地化計画
第4のタブレット	141	惑星地球での鉱物資源確保——地球支配神の誕生
第5のタブレット	171	宇宙空港の本格的建設——宇宙の神々の反乱
第6のタブレット	201	遺伝子工学による奴隷人類の創造——原始的労働者の生産
第7のタブレット	233	第12惑星ニビルの接近——エンキとの自然受精による地球人類誕生
第8のタブレット	267	惑星ニビルへの人類初の宇宙旅行——「農耕・牧羊」文明の始まり
第9のタブレット	299	地球人類の増殖、旱魃、疫病——迫り来る大洪水

第10のタブレット	331	実録『大洪水の天変地異』——ノアの箱舟の超真実
第11のタブレット	363	宇宙の神々を二分する古代地球大戦争——終戦協定の行方
第12のタブレット	395	宇宙の神々の一聖域——人類に与えられた三大文明の地域
第13のタブレット	427	地球最初の古代核戦争——繰り返された覇権争い
第14のタブレット	459	新たな最高権力神の誕生——地球人類へ遺された予言

## 太陽系と第12惑星

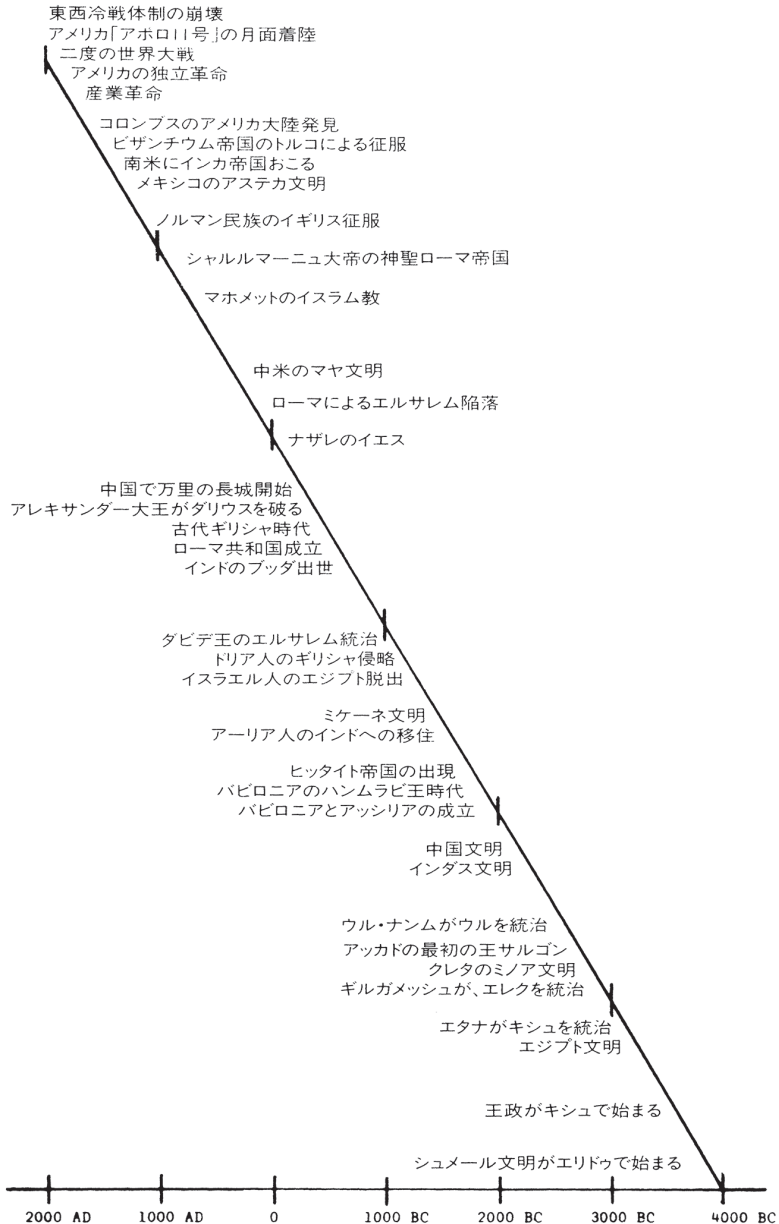


太陽系の惑星と太陽と月の位置関係を図式的に表わしたもので、縮尺は正確ではない。九つの惑星と太陽と月のほかに「12番目の惑星」(古代神々の故郷)が出ているが、この惑星は公転周期が3600年で、離心率も大きい。古代シュメール人は、太陽系の恒星と惑星を区別していなかったので、本書でも「12番目の惑星」あるいは「第12惑星」と呼んでいるが、現在の常識的な呼び方では、「10番目の惑星」あるいは「惑星X」である。

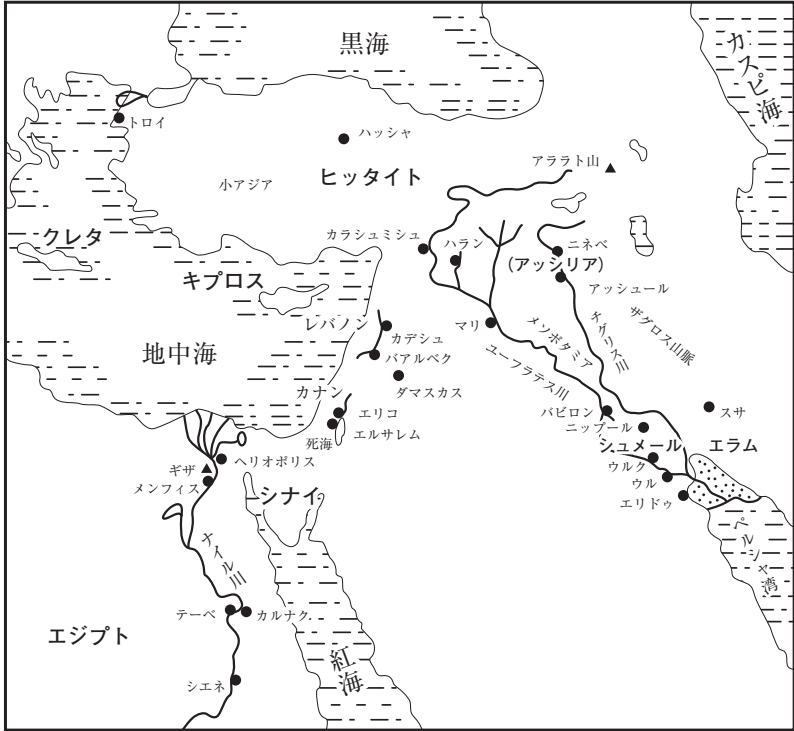
## 「宇宙からの神々」による人類創成史

(年 代)	(出 来 事)
44万5000年前	・アヌナキがエンキ（エア）に導かれ、第12惑星より地球に降り立った。エリドゥ8（地球第1基地）が南メソポタミアに建設された。
43万年前	・大きな氷の広がり小さくなり始める。近東の地域では良い気候が続いた。
41万5000年前	・エンキが内陸を踏査し、ラルサをつくった。
40万年前	・長期の間氷河期が地球規模で広がった。エンリルが地球に到達し、ニップールに派遣団司令（宇宙飛行管制）センターをつくった。 エンキが南アフリカに行く海路をひらいた。
36万年前	・アヌナキが金属を溶解し精製するための冶金工場を建設した。 シッパールをはじめとする神々の都市に、宇宙港がつくられた。
30万年前	・アヌナキの反乱。人—原始人がエンキとニンハルサグによってつくられた。
25万年前	・初期のホモ・サピエンスが多数、大陸へ移住した。
20万年前	・新氷河期の間、地球上の生命が後退した。
10万年前	・気候が再び暖かくなり始めた。 神々の子たちは人間の娘を妻に迎えた。
7万7000年前	・聖なる親から生まれた人間ウバルツツとラメクがシュルバクで、ニンハルサグの庇護の下、統治を始めた。
7万5000年前	・地球受難の時代—新氷河期が始まった。退化した人間が地球を放浪していた。
4万9000年前	・忠実な下僕ジウスドラ（ノア）の統治が始まった。
3万8000年前	・7期間も続いた過酷な気候で人が死に始めた。 ヨーロッパのネアンデルタール人は滅び、クロマニヨン人だけが近東の地域で生き延びた。 エンリルが人間を抹殺しようとした。
1万3000年前	・アヌナキは、第12惑星の接近が引き金となる洪水が来る事を知っていながら、人間には知らせず、滅亡させてしまおうと誓った。 大洪水が地球を襲い、氷河期が突然終わった。

# その後の人類史



# 「宇宙からの神々」が降り立った古代メソポタミアとエジプト周辺図



## 前置き 太陽系第12惑星の「宇宙からの神々」はなぜ地球で人類を創成したのか

およそ44万5000年前、別の惑星から宇宙飛行士たちが黄金を探しに地球へやってきた。地球の海に着水した彼らは、歩いて陸へたどりつき「遠く離れた地のわが家」エリドゥを築いた。やがて、この最初の入植地は、宇宙飛行管制センターや宇宙船基地、採鉱活動、さらには火星の中継ステーションさえ擁する、一大地球ミッシェンへと発展した。

人手不足をおぎなうため、宇宙飛行士たちは遺伝子工学を駆使して原始的労働者——ホモサピエンス——を作り出した。その後、地上を壊滅的に流しさった大洪水によって新たなスタートを迫られた宇宙飛行士たちは、自らが神々となり、人類に文明をささげ、神々を崇拜することを教えた。

しかし、4000年ほど前に、この地球への訪問者たちは、抗争を繰り広げたあげく、自らが引き起こした核兵器の災禍によって、築きあげてきたすべてを失ってしまった。

地球上でなにが起こったのか、特に人類の歴史が始まって以来の出来事については、ゼカリア・シツチンが自著『地球年代記シリーズ』において、聖書や粘土板、古代神話、考古学的発見物をもとに解き明かしてきた。しかし、地球上での出来事にさきだつてなにがあったのか、すなわち宇宙飛行士たちの故郷である惑星ニビルでは、宇宙への旅や、黄金の入手、人間の創造を余儀なくされた、どんなことが起きていたというのだろうか？

エリドゥ……地球での最初の入植地。エアによって築かれた。シユメールにある彼の不朽の拠点であり住居

宇宙飛行管制センター……大洪水の前はニラル・キ（ニツパール）、大洪水の後にはモリア山にあった

原始的労働者……最初の遺伝子操作した地球人

大洪水……（聖書の創世記に記された）大洪水

ニビル……アマナナキの故郷の惑星。その軌道周期、シャルは3600地球年。空の戦闘。その後12番目の太陽系の仲間になった

どのような感情、敵対関係、信念、道德（あるいは、その欠如）が、天空と宇宙の冒険談の主要登場人物たちを駆りたてたのだろうか？ ニビルと地球において、緊張を高まらせたかった相互関係とはいかなるものだったのか。古参と若者たち、ニビルからやってきた者たちと地球で生まれた者たちとの間に、どのような緊張関係が生じたのだろうか？ そして、どの程度までが神——その神が記した過去の出来事の記録が未来への鍵を握っているのだが——の意向によって起こるべくして起きたのだろうか？

主要登場人物のひとり、つまりすべての目撃者であり、変更可能な宿命と変更不可能な運命とを識別することができる者が、後世のために——最初の出来事と、ことによると最後の出来事が——「いつ」「どこで」「どのように」「なぜ」起きたのか記録してくれていたら、こんなありがたいことはない。

ところが、彼らのなかに、まさにそれをした者たちがいたのである。そして、それをまっさきに実行した者こそ、最初の宇宙飛行士団を指揮したリーダーにほかならなかった。

現在では、学者や神学者たちも、天地創造やアダムとイブ、エデンの園、大洪水、バベルの塔といった聖書の物語が、それより1000年早くメソポタミアで、シュメール人によって書き記された文書がもとになっていることを認めている。さらに、そのシュメール人たちも同様に、過去の出来事——多くは文明が始まる以前の、人類が存在する前にまで遡る時代からの——についての知識をアヌンナキ（「天から地へやってきた者たち」の意）、すなわち古代の「神々」が記した文献から得た、と説明しているのだ。

宿命……自由選択に左右される事の成り行きで、変更可能

運命……変更不可能なあらかじめ決定された（出来事や軌道の）成り行き

アヌンナキ……天から地球へやってきた者たち。（ニビルから地球へ）



古代文明の遺跡、特に近東での1世紀半におよぶ考古学的発見の結果、そのような初期の文書が大量に見見されている。これによって、現在は紛失してしまったが、発見された文書のなかで言及されている、もしくはそこから推測される文書、あるいは王室や神殿の図書館目録で、その存在が確認されている文書——いわゆる失われた本——の量も明らかになった。時には、<sup>ル</sup>神々の秘密<sup>が</sup>が文書のなかに垣間見えることもあった。大洪水で人類を滅ぼそうという結論に至った神々の論争を暴露する『ギルガメッシュ叙事詩』のような叙事詩的物語や、原始的労働者たち——地球人——の創造へとつながった、金鉱で労苦を強いられていたアヌナキの反乱を想起させる『アトラ・ハシス』と題された文書などである。宇宙飛行士のリーダーたち自身が記した文章もある。核兵器による惨禍を招いた2人の神のうちのひとり<sup>が</sup>、相手に責任をなすりつけようとする内容の『エツラ・エポス』と呼ばれる文書のよ<sup>うに</sup>、選ばれた筆記者に文書を口述筆記させることもあれば、地下部屋に神が隠したとされる『トト（エジプトの知恵の神）の秘密の書』のケースのように、神自ら書き記すこともあった。

聖書によれば、主なる神ヤハウエがその選ばれた民に十戒をさずけた際、神は最初、2枚の石板を御自身の手で刻まれシナイ山でモーセに与えた。だがモーセが黄金の子牛の事件でその最初の2枚の石板を投げ落として割ってしまったため、シナイ山に40日40夜とどまり、主が口述された言葉を代わりの石板に記したのである。

エジプトのクフ王（ケオプス王）の時代のパピルスに、『トトの秘密の書』についての話

ギルガメッシュ……ウ  
ルクの王。ある女神の  
息子であり、不死を捜  
しに出かけた

が記録されていなければ、この書の存在は知られることはなかっただろう。聖書の出エジプト記と申命記でこの物語に触れられていなければ、わたしたちが神の石板とその内容について知ることは決してなかっただろう。すべては、その存在そのものが決して日の目を見ることのない「失われた本」という得体の知れない物のなかに埋没していただろう。なにより堪えがたいのは、ある文書が存在したことはわかっているのに、内容は闇のなか、という事態だ。聖書で明確に言及されている『主の戦いの書』と『ヤシャルの書』（「正義の書」の意）のケースがそれだ。また、少なくとも2つの事例で、より古い本——聖書の語り部に知られていた、より前の文書——の存在が推測できる。たとえば、創世記の第5章は「これはアダムの系図の書である」という文ではじまるが、通常は系図と訳されている Toledoth という言葉は、もっと正確には「歴史的に重要な記録や家系の記録」を意味する。創世記の第6章でも、「これはノアの物語 (Toledoth) である」という言葉で、ノアと大洪水にまつわる物語がはじまる。実際、『アダムとイブの書』として知られるようになった本は、部分的にだがアルメニアやスラブ、シリア、エチオピア各語で1000年にわたって生き残ってきたし、「エノクの書」（聖典と認められない、いわゆる聖書外典のひとつ）には、学者たちがさらに前の時代の『ノアの書』の断片であるとみなす部分が含まれている。

失われた本の量に関する例として、よく引きあいにだされるのは、エジプトの名高いアレキサンドリア図書館だ。紀元前323年にアレクサンドロス大王が亡くなった後にプロトーマイオス将軍によって設立され、50万「巻」——さまざまな素材（粘土、石、パピルス、羊皮

紙)に記された本——以上を所蔵していたといわれる。大図書館には、蓄積された知識を学ばずに学者たちが集まっていたが、紀元前48年からはじまり紀元642年にアラブ人によって征服されるまで続いた戦争によって、破壊されて焼け落ちた。その財産で残ったのは、ヘブライ語聖書のギリシア語翻訳版のうち最初の5巻と、図書館専従の学者たちの著作に書き留められていた断片だけだ。

こうして、わたしたちは、紀元前270年頃にプトレマイオス2世がギリシア語でマネトと呼ばれていたエジプト人神官に、エジプトの有史および有史前の歴史を編纂するように命じたことを知ることとなった。はじめは神々だけがその地を支配し、それから半神半人たちが、そして最後に、紀元前3100年頃にファラオによる王朝がはじまったとマネトは記している。神の治世は、マネトによれば、洪水の1万年前にはじまり、その後、数千年続き、後者の時期には神々の抗争や戦争を経験した。支配権がセレウコス将軍とその後継者たちの手に落ちたアレクサンドロス大王のアジア統治領でも、同様に、過去の出来事の記録をギリシア人の碩学<sup>せきがく</sup>たちに提供しようという試みがおこなわれた。バビロニアの神マルドウクの神官ペロソスは、ハラン(現在のトルコ南東部)の神殿図書館で粘土板の蔵書を閲覧し、大洪水より43万2000年前に神々が天から地球へやってきた時から始まる、神々と人々の歴史を3巻に書き記した。ペロソスは、最初の10人の指揮官たちの名前と統治期間をリストアップし、最初のリーダーは、魚のような出で立ちで海から陸へ歩いて渡ってきたと伝えている。彼こそ人類に文明を与えた者であり、ギリシア語に訳されたその名を、オアンネス

マルドウク……エンキとダムキナの長男で正当な世継ぎ。エジプトでラーとして崇拜された。自分の兄弟たちを嫉み、自分の領地がエジプトだけなのが不満で、地球の覇権を要求し、追放と戦争の後、自分の都バビロンから覇権を獲得した

ハラン……ウルの双子都市としての役割を果たすメソポタミア北西部(いまのトルコ)の都。アブラハムの逗留地。地球での覇権を強奪するためのマルドウクの拠点

といった。

このように、神官マネトとペロソスは両者とも、地球へやってきた天の神々のこと、神々だけが地球を統治していた時代のこと、壊滅的な大洪水のことを記述しており、多くの細部でびったり合致している。ペロソスは3巻の書の中で（当時の他の著作物で引用文として現存する断片的な文章）、大洪水以前の著作物——古代の神々によって築かれた最初の都市のひとつで、シッパルと呼ばれた古代都市に隠されていた石板——の存在を明確に報告している。

シッパルは、他の神々の都市と同じように、大洪水に飲み込まれ壊滅したが、この大洪水以前の著作物は、アッシリアの王アッシュールバニパル（紀元前668—633）の年代記で言及されていたことから世に知られることとなった。19世紀中葉に、古代アッシリアの首都ニネベ——それまでは旧約聖書のなかだけで知られていた——を発見した時、考古学者たちはアッシュールバニパルの宮殿遺跡で、およそ2万5000枚にのぼる粘土板が残る図書館をみつけた。『昔の文書』の熱心な収集家だったアッシュールバニパルは、自身の年代記で次のように自慢している。

「筆記の神がその技の知識を余に授けてくださった。余は書くことの極意を手ほどきされた。余はシュメール語の難解な書き板さえ読むことができる。余は洪水の前の日々から伝わる石彫刻の謎めいた言葉さえわかるのだ」

シュメール文明は、現在のイラクにあたる地において、エジプトのファラオ時代より10

シッパル……ウツが指  
揮した大洪水前の時代  
の宇宙船基地都市。大  
洪水後の彼の崇拜セン  
ター

00年近く前に花開き、両文明の後にインド亜大陸のインダス文明が続く。現在では、シュメール人が最初に神々と人の年代記や物語を書き記したことも知られており、そこからヘブライ人を含め、他のすべての人々が天地創造やアダムとイブ、カインとアベル、大洪水、バベルの塔の物語を受け継ぎ、さらに、ギリシア、ヒッタイト、カナン、ペルシア、インドⅡヨーロッパ語族の著作物および回想録に反映されているように、神々の戦いと愛の物語を手に入れたのだ。これらの古い著作物すべてが実証しているように、それらの原典は、さらに初期の文書なのである。なかには発見されたものもあるが、大半は失われてしまった。

そうした初期の著作物は驚くべき量にのぼる。古代近東の遺跡では数千どころか数万におよぶ粘土板が発見されている。おおかたは、日常生活に則した、商売や労働者の賃金、結婚に関する契約書の類いだ。その他、主に宮殿図書館でみつかったものは、王室年代記の性質を帯びている。また、神殿図書館や筆写学校の遺跡で発見された文書は、シュメール語で書かれ、次にアッカド語（最初のセム系語）へ、さらに他の古代言語へと翻訳され、聖典と認められた文書グループ、すなわち機密文献を構成している。このように6000年近くさかのぼる、初期の著作物においてさえ、失われた「本」（石板に刻まれた文書）について言及されているのだ。

古代都市やその図書館の遺跡での、信じられないほどすばらしい発見物——幸運は奇跡をそっくり全部は運ばないとは言いが——に、まさにペロソスが参照したといわれる、大洪水前の10人の統治者たちと、合計で43万2000年に及ぶその治世についての情報が彫られ

アッカド語……すべてのセム系諸語の母語。  
アッカドはサルゴン1世のもとでシュメールへ加えられた北部地域

た角柱がある。『シュメール王名表』として知られている（イギリス、オックスフォードのアシュモolean博物館で展示中）。それらのいくつかの版では、シュメール人編纂者たちが、それより初期の時代の普通文書や聖典と認められた文書を参照していることに、疑いの余地はない。これらの文書と、さまざまな保存状態で発見された、他の同程度初期の文書はともに、地球到着とその前後の出来事を記したもともとの記録者が、その重要な登場人物であり目撃者でもある、前述の10人の統治者たちのひとりであることを強く示唆している。

これらすべての出来事を目撃した人物、実際にその重要な関係者だった人物こそ、最初の宇宙飛行士団とともに地球に着水した指揮官なのだ。当時の彼の通り名は「水が故郷の彼」を意味するエ・アであった。彼は地球ミッシヨンの指揮権が異母兄弟でライバルでもあるエン・リル（「指揮権の主」）に渡されたことで失望を味わった。エン・キ「地球の主」という称号を与えられても、その屈辱が消えることはなかった。神々の都とエ・デイン（「エデン」）にある宇宙船基地から左遷されて、金の採掘を監督するためにアブ・ズ（南東アフリカ）に赴き、その地域に住んでいたヒト科の動物にでくわしたのが、このエア／エンキ——偉大な科学者——である。そうした経緯から、金鉱で労苦を強いられていたアヌンナキが「もうまっぴらだ！」と反乱をおこした時、遺伝子工学によって進化を早回しすれば必要な労働力を獲得できることに気づいたのも彼だった。こうしてアダム（文字通りには「地球上の彼」、地球人）が存在するにいたった。アダムは交配種のため、子をなせなかった。この出来事と呼応するエデンの園でのアダムとイブの聖書物語は、エンキが男女の生殖に必要な染色体性

エ・ア……故郷が水の者、水瓶座の原型。アヌの長男、エンリルの異母兄。地球にやってきたアヌンナキの最初の一回のリーダー。人類を形作った者であり、大洪水からの救済者。又デウムド（形作者の者）、プタハ（エジプトでの開発者）、エンキ（地球神）のあだ名を持つ。マルドゥクの父

エデイン……アヌンナキの最初の入植地の所在地、聖書のエデン、モンボタミアの南部にある。後のシュメールの地域

エンキ……異母弟でありライバルであるエンリルとのあいだで職務と権力を分割したあと、エアのあだ名的敬称。配偶者ダムキナによって産まれたマルドゥクの父。異母妹ニンマーとの息子を設け損なったが、愛人たちによる他の5人の息子と、地球人女性たちとの子

遺伝子を追加した際の、2度目の遺伝子操作について記録している。そして、人類が増殖して思い通りにならなくなったため、大洪水——その英雄は聖書ではノアと呼ばれ、より初期のシュメール語原典ではジウストラと呼ばれていた——で人類を滅ぼしてしまおうと画策した兄弟エンリルに公然と反抗したのも、彼、エンキだった。

ニビルの君主アヌの長男であるエア／エンキは、自分の惑星（ニビル）とその住民たちの過去に精通していた。秀でた科学者であった彼は、アヌンナキの高度な知識のなかでも、もっとも重要な技術を、特に2人の息子マルドゥクとニンギシュジツダ（それぞれエジプトの神ラーとトトとして知られた）に伝え残した。

彼はそれだけでなく、選別した人間に「神々の秘密」を教えて、高度な知識のなかから一定の技術を人類とわかちあうことにも尽力した。

秘伝を授けられた者たちが、神の指示に従って、その教えを人類の遺産として書き記している事例が、少なくとも2つある。ひとりには、エンキと人間の女性とのあいだにできたときされる息子のアダパで、もっとも初期の失われた本のひとつ、『時に関する著作』と題する本を記したことが知られている。もうひとりには、エンメドウランキと呼ばれた人物で、十中八九、聖書に登場するエノクの原型、つまり、神の秘密の本を息子たちに託して天にあげられたその人であり、この神の秘密の本が形をかえて聖書外典の『エノクの書』として生き残ったのだらう。

エアはアヌの長子でありながら、父からニビルの王位を継承する運命になかった。ニビル

供たちの父となった

ジウストラ……大洪水の英雄、エンキと地球人との息子（聖書のノア）

エンリル……アヌの息子で、配偶者が妹のアンツであるため、長子のエアより先にニビルの王座の継承者の権利を与えられる。第1位の息子。軍司令官で管理者、大規模な金調達活動を組織するために地球に送られた。異母妹ニンマーによって産まれたニヌルタの父にあたり、配偶者ニンリルによって産まれたナンナルとイシユクルの父。地球人を形作ることに反対し、大洪水によって人類を滅ぼそうとした。マルドゥクに対して核兵器を使うことを許可した

人の複雑な歴史を反映する、込み入った継承規則により、その特権はエンキの異母弟エンリルに与えられたのだ。2人の熾烈な対立を沈静化させるため、エンキとエンリルはともに異国の惑星——地球——へ派遣されることとなった。

ニビルの大気減少を食い止める保護シールドを作るために、地球の金が必要だったのだ。そうしたことを背景に、彼らの異母妹ニンハルサグ（アヌンナキの軍医長）が地球に配備されたことによって、さらに事態は込み入った状況となり、エンキは大洪水で人類を滅亡させようというエンリルの計画にたてつくことを決意したのだった。

この異母兄弟の軋轢<sup>あつれき</sup>は息子たち、さらには孫たちの代にまで続いた。彼らは全員、特に地球で生まれた者たちは、寿命が縮む事態に直面しており、ニビルの長い軌道周期が輪をかけるように個人的な苦悶を増大させ野心をあおったのだ。

紀元前3世紀のおわりに、エンキと正妻とのあいだの長子マルドゥクが、地球を相続すべきなのはエンリルの長男ニヌルタではなく自分だと主張したとき、すべてはクライマックスに達した。あいつぐ戦争も含め、熾烈な軋轢は、最終的に核兵器の使用へと至った。それに続く、しかし予期せぬ結果は、シュメール文明の終焉だった。

選ばれた人間へ「神々の秘密」を伝授することから、司祭職、すなわち神々と人間との仲介者の血統、死すべき運命の地球人へ神の御言葉を伝達する者がはじまった。御神託——神の発言の解釈——は、前兆を探して天を観測することと混ぜ合わされた。そしてだんだんと、対立する神々の両陣営に人類が引き入れられていくに従って、予言が重要な役割を果たした

ニンギンシュジツダ……  
エンキの息子、遺伝学  
と他の科学に精通。古  
代エジプトでテフティ  
（トト）と呼ばれた。  
兄マルドゥクによって  
退位させられた後、信  
奉者たちとアメリカ大  
陸へ渡った

ラー……マルドゥクの  
エジプト語名。輝い  
ている者。意味する  
アダバ……エンキと地  
球人女性との息子、最  
初の。文明化された  
人。聖書のアダム

ニンハルサグ……シナ  
イ半島の住居を授けら  
れた後のニンマのあだ  
名

ニヌルタ……エンリル  
の第1位の息子、エン  
リルの異母妹ニンマが  
母で、彼の正当な継承  
者。運命の石板を  
奪ったアンスズ、マル  
ドゥクと戦った。黄金  
の代わりの供給源を見  
つけてアメリカ大陸に  
代替の宇宙施設を築



じめた。実際、来るべきことを宣言する神々の代弁者のことをナビーというが、これは、追放された父マルドゥクに代わって、天空の印がマルドゥクの主権到来を示していることを人類に確信させようとした、長男ナブのあだ名であった。

こうした進展のなか、運命と宿命を識別しなければならぬという認識が強まっていた。かつては疑問の余地なく受け入れていたエンリルの、時にはアヌの布告でさえ、ナム——進路が決定されていて変えることができない惑星軌道のような、変更できない「運命」——と、曲げたり壊したりして変えることができる運命、すなわち「宿命」であるナム・タルのどちらなのかを、吟味する対象となった。一連の出来事、そしてかつてニビルで経験したことと地球で起きたこととの明らかな類似性を回想し、再考することで、エンキとエンリルはなにが実際に不可避な運命であり、なにが正しい決定、あるいは間違った決定と自由選択の結果としてもたらされた単なる宿命であるかを、達観しはじめた。後者は予測できないが前者は予見できる——特に、すべてが惑星軌道のように周期的であるのなら。なにかが再び巡ってくるのなら、最初の事柄が最後の事柄ともなるのだから。

核による荒廃という最高潮の出来事は、アヌナナキの指導者たちの内省を高め、こういう結果に至った理由を、途方に暮れた人間集団に説明する必要性を感じさせた。それは運命づけられていたのか、それともアヌナナキが引き起こした宿命にすぎなかったのか？ 誰に責任があったのか、説明する義務がある者はいるのか？

惨禍の前夜に開かれたアヌナナキの会議で、禁断の武器を使うことにひとりて反対したの

いた。ラガシユの守護神

ナブ……マルドゥクとサルパニトの息子。マルドゥクの組織化された人間の信奉者たち

は、エンキだった。従ってエンキにとって、よかれと思ったのに結果として破壊者となってしまった地球外生物たちの冒険談が、どこでまちがってしまったのかを、罹災した生き残りたちに説明するのは重要なことだった。そして、最初にやってきて、すべてを目撃したエア／エンキ以外に、未来が予見できるよう過去の話を伝えることができる適任者がいただろうか？ すべてをつまびらかに語る最善の道は、エンキ自身による1人称で伝えることだった。彼が自叙伝を記したことは確かだ。ニップールの図書館で発見された長い文書（少なくとも12枚の碑板に及ぶ）が次のようなエンキの言葉を引用しているのだ。

わたしが地球に進入すると、

大量の水が流れていた。

わたしはその緑の牧草地に近づき、

わたしの命令で

堆積と土手が積み上げられた。

純粹な場所にわたしは家を建て、

それにふさわしい名をつけた。

この長い文書は、その後エア／エンキが副官たちに任務を割り当て、地球へのミッションに乗りだした経過を説明している。

ニップール……地球年での暦が紀元前3760年にはじまった、ニブル・キのアッカド語名。イブル・ウム（アブラハム）の生まれ故郷

その後の地球発展におけるエンキの役割については、おびただしい数の文書がさまざまな側面から補充している。そのなかには、学者たちが『エリドゥの創世記』と呼ぶ、エンキ自身の文書を核とした宇宙創世論、『天地創造の叙事詩』が含まれている。そこには、アダムの形作ったことについての詳しい記述が含まれる。男女問わず他のアマナンキが、<sup>メ</sup>——文明のあらゆる側面をコード化した一種のデータディスク——を入手しに、彼の都エリドゥにエンキを訪ねてきた様子も記されている。さらに、異母妹ニルハルサグとのあいだに息子をもうけようと試みた話、女神たちや人の娘たちとの乱交とその予期せぬ結果、といったエンキの私生活や個人的な問題についての文書も含まれている。『アトラ・ハシス』文書は、地球の領地をエンキとエンリルに分割させて、2人の対抗意識が燃え上がるのを阻もうとするアヌの取り組みに光を当てている。そして、ノアと方舟の話——『ギルガメッシュの叙事詩』としてメソポタミアの原版のひとつが発見されるまで、聖書でしか知られていなかった話——を収録した文書では、人類の運命を決める会議での神々の議論が、ほぼ一言一句そのまま描写され、エンキの策略も記されており、大洪水にさきだつ出来事を記録している。

シュメール語とアッカド語の粘土板、バビロニアとアッシリアの神殿図書館蔵書、エジプトやヒッタイトやカナン人の「神話」、そして聖書物語が、神々と人間にまつわる記憶を書き記した主要本體である。今回はじめて、この拡散する断片的な素材をゼカリア・シッチンが整理して、エンキの目撃報告——ひとりの地球外生物である神による自叙伝的回想録を洞察にみちた予言——を再現した。

メ……科学と文明のあらゆる局面の解決策を符号化されたとても小さな物体

適切な時に封を解くべき「目撃証言の書」として、選ばれた筆記者へエンキが口述筆記させた本書は、預言者イザヤ（紀元前7世紀）へのヤハウエの指示を思い起こさせる。

さあ来なさい、

封印された碑板に記すのだ、

それに本を刻み込んで。

それに最後の日まで見届けさせるのだ、

永遠の証として。

### イザヤ書30章8節

過去と向き合うことで、エンキ自身が未来を理解した。アマンナキは自由意志を行使しており、自分たちの宿命（人類の宿命と同じように）を自由に操ることができると考えたが、最終的にすべてが語られ実行されたとき、出来事のみなりゆきを決定したのは実は運命であったという認識にとって代わったのだ。従って——ヘブライの預言者たちが悟っていたように——最初の事柄は最後の事柄となるのだ。

エンキが口述した出来事の記録は、こうして予言の礎いしすえとなり、過去は未来となる。